

## よりよい生き方を探求する力を育む道徳 友のしょうぞう画 ～友情の尊さ

和田 雅博

### 1. よりよい生き方を探求する力を育む道徳の授業

人は生きていく以上、「よりよく生きたい。」という願いを持っている。また、自分の子供や児童・生徒を「よりよく成長させたい。」と願わない親や教師はいない。この願いを実現しようと目指して生きるところに道徳が成り立ち、道徳教育の意義がある。よりよい生き方とは、個人の価値によって規定されるものであり、そのよさは同じ社会を構成する人間であっても同じではない。しかし、他者や自然とどう関わりながら自己をどう捉えて、社会を築く一員として自分はどうあるべきかを考えることはよりよい生き方を探求する上で必要不可欠だと考える。判例的・慣例的に道徳的価値を判断することがよりよく生きることにつながるとは言い切れない。よりよい生き方を探求することとは、なぜ、そこに道徳的価値が見出されるのか考え、自らよりよく生きたいという願いについて吟味し、精査し続けることを指し、そうした力を道徳の時間で育むべきだと考える。

### 2. 道徳における「知」

道徳における「知」とは、自ら直面する状況において、他者には個々に様々な道徳的価値判断が存在することを知り、自らの自覚において経験をもとに判断する力である。そのためには、授業で扱う資料等を通して把握する場面・出来事・登場人物等に対して、自分のことのようにとらえ考えることが必要となる。昨年度は小学校、中学校でこの道徳における「知」の構築を目指して、小中連携して同一資料を用いた授業研究を進め、発達段階に応じた道徳の授業を提案した。今年度はさらに小学校・中学校の9年間で道徳における「知」を鍛えるために、自分のことのようにとらえ考えることのできる授業展開について共同研究を進めていく。

### 3. 「知」を鍛える授業展開

道徳における「知」の認識・構造化・活用するための具体的な手立ては以下の通りである。

#### (1) 「知」の認識

ねらいとする道徳的価値に対して考えていることを自分の持っている知識・経験をもとに認識する。自分はこの道徳的価値に対して「このようにとらえ、考えているのだ。」と認識することで、資料の内容を自分に引き寄せながら主体的に読みやすくなると思う。また、最終的に、その価値に対して自分はどうあるべきか考えられるように、ここで認識したことを「知」の活用の場面で比較して考えることも必要に応じて行う。

#### (2) 「知」の構造化

資料等の場面・出来事に対して、あらゆる見方・考え方があつてことを知り、新たに道徳的価値の自覚を図る。そのために自分の知識・経験をもとに考えを述べることのできる場面で発問したり、自分のことのように捉えられるよう補助資料を提示したりして、自分のもつ知識や経験と重ね合わせながら道徳的価値についての自分なりの考え方を持たせる。その考えを友だちと共有する場面を設け、あらゆる見

方・考え方があることを知り、自分の中にあるよりよく生きたいという願いから新たに道徳的価値を自覚する。また、友だちとの意見の共有が、その発見につながるような板書や発問を工夫していく。

### (3) 「知」の活用

新たに道徳的価値を自覚することでこれから自分はどうかあるべきか考えていく。そのために、資料等を通して新たに自覚した道徳的価値について語る場面を設け、よりよく生きたいという願いのもと考えを深めていけるようにする。

このように小学校、中学校で共通の手立てを行うことで、それぞれ発達段階に応じた道徳的価値における「知」を獲得できるだけでなく、9年間の学習の連続性の中で鍛えることのできる道徳における「知」を明らかにする。

## 4. 小中9年間の学びの階層性・系統性・連続性

本年度は、2-(3) 友情の道徳的価値で、この授業展開を用いて9年間の学習の連続性の中でそれぞれの発達段階で鍛えることのできる道徳における「知」を明らかにしていく。学習指導要領で示されている内容項目は以下の通りである。

<小学校> 低学年「友だちと仲よくし、助け合う。」

中学年「友だちと互いに理解し、信頼し、助け合う。」

高学年「互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲よく協力し助け合う。」

<中学校> 「友情の尊さを理解して心から信頼できる友だちを持ち、互いに励まし合い、高め合う。」

このように、友情とは相手のことを親しく思う気持ちから芽生えていく情緒的側面から育まれるものだと考える。そこに相手の立場や考えを推し量る認知的側面が加わることで相手への情が増していく。小中9年間の中で友情の価値について他者と関わりながら自らの自覚において経験をもとに判断する力を鍛えるために、小学校では主に「知」の構造化、中学校では主に「知」の活用に重点をおいて授業を展開していく。小学校では、相手の立場や考えを正確に理解することに重点を置くことで相手への情が増し、よりよい友情について考えを深めることができると考える。また、中学校では、経験を重ね認知的側面が備わってきていることから、同じ資料の中で考えた一人一人の友情観を語り合う機会が多いことで、考えることができると考える。

友情の道徳的価値を扱った資料等を通して、主人公の気持ちを自分自身の知識・経験をもとに考え共有する過程において、よりよく友だちを捉えたいと考えた時に自分の中で足らなかった部分に気付いたり、新たな捉え方が自覚できると考える。そのためには、主人公を自分と重ねて考えることが必要である。先に行った実践「二わのことり」では小中同一資料を用いて行った。その時「こっそり」という言葉に着目し主発問を構成した。小学校5年では「こっそり抜け出したのは、なぜか。」と問い、中学2年では「こっそり抜け出すことが本当によかったのか。」と問うことで発達段階に応じて自分に引き寄せて友だちについて考えられるように設定した。小学校5年では「自分が仲間外れされる後ろめたさからそうしたが、それでも行ったのは手紙を出したやまがらの誕生日を自分は友だちとして祝ってあげたいと思ったから。」とやまがらの立場や思いを考えて行ったという意見、中学2年では「やまがらのことを思う気持ちは当然あったものの、うぐいすや小鳥たちにも話せばわかってもらえたのではないか。」とうぐいすや小鳥たちのことを信じて関わっていくことの大切さを表す意見が出た。

今回は、「友の肖像画」という資料を用いて、小学5年、中学2年で同じ授業展開で行い9年間で鍛えることのできる道徳における「知」を明らかにしていく。

## 5. 主題設定の理由

ここでは、大阪教育大学附属池田中学校 2 年 C 組 (40 名) を対象に授業をした実践を報告する。

子どもはだれでもよりよく生きたいと願っている。その気持ちを生活の中で実現していこうとする豊かな人間性とその基盤となる道徳性を育てることが心の教育であり道徳教育が目指すものである。しかし、現在、子どもの道徳性の育成を阻害している状況が指摘される。例えば、家庭や地域社会の教育機能が揺らぎ、社会全体のモラルが低下、さらに人間関係の希薄さは心の発育にも大きな影響を与えている。本授業では、「友のしょうぞう画」を資料とし、中学校における道徳の内容事項 2-(3)「友情の尊さ」に焦点を合わせ、互いに信頼し合って友情をはぐくむことの大切さに気づき、切磋琢磨し友情を深めていこうとする心情を育てる。

私たちは複雑な人間関係の中で生きているが、それは要約すると 1 対 1 の自他の関係である。かつ相互に関わり合っているその基底には根源的な意味での信頼がある。すなわち、根源的な意味における信頼がなければ人間関係は成立しない。よって、約束とは信頼があってこそ可能なのであって、不信の関係においては約束すること自体が成り立たない。また、単に仲よくするというのであれば人間関係のすべてにわたって仲よくすることが大切である。しかし、友情における仲よくする仕方、よって友情の本質が考えられなければならない。その本質は切磋琢磨にある。ただ群れていても、困難に出会ったときに逃避していても「友だち」とは言えない。友だちとは最小限、助け合い励まし合う関係でなければならない。互いに個性を認め合い、戒め、その忠告に耐え得るものであって初めて友情の有難みがわかるのである。それは危機に直面して初めてその信実が試され「助け合い励まし合う」ことが必要であり、さらには忠告し合える段階にまで高めることが必要である。

友情の第一特質は「対等性」である。年齢、性別、近所、同郷出身、その他相等的な似かよったもの間に友は成立しやすい。また、第二に「相互性」である。相互の均衡を保つためにも、互いに「give and take」の関係が友情を支える。そして第三には「個性を認め合うこと」である。その上で励まし合って個性的能力を伸ばし合うようではなければならない。友情の本質は切磋琢磨である。

本授業では、和也の心の推移と正一の和也を思い続ける 2 人の気持ちを取り上げる。和也はずっと友だちでいたいと願い文通を約束する。正一から手紙が来なくなったことに和也は一時不安を抱き、やがてその不安さえも薄れていってしまう。この和也の心の推移に着目し、和也の友情を深めようとする気持ちの弱さを生徒に気付かせたい。また、和也が正一の作品解説を見たときとその帰路で目をつむったときの気持ちの比較から、生徒に自分の友情の捉え方と今後の生き方・在り方を深く考えさせる。

生徒は、同じクラス・班や部活動など時間を共有することが多いことから友との関係が深まっていくことが多い。仲のよい友だちとは一緒にいて楽しい、何でも話せることを願っている。一方で、自分が不安を感じてしまう場面では、相手の些細な言動から「私のことを少しもわかってくれない」と原因を友だちのせいにしてしまい、自分は悪くないと思ってしまう傾向がある。互いに信頼し合って、友情をはぐくむことの大切さに気づき、ともに切磋琢磨できる友情を深めていこうとする自覚を模索させる。

## 6. ねらい

互いに信頼し合って友情をはぐくむことの大切さに気づき、切磋琢磨して友情を深めていこうとする心情を育てる。

## 7. 展 開

| 学習過程 | 学習活動   | 指導上の留意点  |
|------|--|--|
| 導入   | 1. 資料を読む。<br>○どんなときに友だちがいてよかったと思いますか。  |  |
| 展開   | 2. 資料について話し合う。<br>①二人は幼いときどのような様子ですか。<br>→幼なじみ<br>→いつも一緒<br>②正一はどんな気持ちで肖像画を彫り続けていましたか。<br>→もういちど和也とサッカーがしたいという希望。<br>→和也への思いを込めて絵で約束を守ろうとしている。<br>③なぜ、和也はなんとなく手紙を書かなくなりましたか。<br>→正一からの手紙が届かなくなってしまったから。<br>→正一の様子がわからなくなったから。<br>④正一にあって和也に無いものとはなんでしょう。<br>→信じ続ける強い気持ち。<br>→ひたむきに努力する姿勢。<br>⑤「涙があふれたとき」と「目をつむったとき」の和也の<br>思いについて考えよう。<br>「涙があふれたとき」<br>→正一の思いに気付き感動して涙がでた。<br>→正一に対して申し訳なく感じた。<br>「目をつむったとき」<br>→手紙を出さなかったことに申し訳なく反省している。<br>→自分には何ができるのか考えている。 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・和也が得意そうに話す様子から幼い二人を捉えさせる。</li> <li>・和也が正一を意図的に励まそうとする姿勢から相手を大事に思う気持ち考えさせる。</li> <li>・正一のことや自分への思いを不安に感じる和也の気持ちに共感させる。</li> <li>・徐々に気持ちが失せてしまった和也の正一に対する見方について考えさせる。</li> <li>・互いに信頼し励まし合い、ともに切磋琢磨できる友情を深めていこうとする自覚を模索させる。</li> </ul> |
| 終末   | 3. まとめ<br>⑥あなたの考えるよりよい友情とはどのようなものですか。  |  |

## 8. 授業の実際

### (1) 導入

資料を読む前「どんなときに友だちがいてよかったと思いますか」というアンケート結果を提示した。

- ・「物事を話しやすい・聞きやすい」(34人)  
…自分がよかった思えることを書いており、そこに自分と相手との相互性は見えない。
- ・「慰めてくれる」、「助けてくれる」(3人)  
…相手から何かを得られることによる安堵感をよいと感じている生徒もいた。
- ・「相談したり・されたりすることで落ち着く」(1人)、「喜びを共有できるから」(1人)  
…相手とつながりがよいと感じる意見もあった。
- ・「勉強において競ったり共有したりできる」(1人) …互いに指摘し合うことを書いていた。

### (2) 資料について話し合う・まとめ

資料を教師が感情を込めて音読し、生徒が資料に入り込めるようにした。資料を読んだ後、生徒たちはずいぶんと心が動かされたようであった。その感動があたたかいまま、すぐに交流の時間をとり、互いに感想を交わす中でねらいとする価値に学級全体で向かう姿勢をつくった。

- ①最初に和也と正一の幼いときの様子を生徒に確認させ、二人がもつ「対等性」を生徒に捉えさせた。幼なじみでいつも一緒なことや和也が得意そうに仲の良さを主張する場面から、この今後の展開において二人の立ち位置の変化を捉える基盤とした。
- ②正一の肖像画を彫り続ける気持ちと③和也が手紙を書かなくなった理由を考え④「和也」と「正一」の二人を比較し、対個人とその違いをとおしてそれぞれの友情に対する思いの差異を捉えさせた。

しかし、今にして思えば和也と正一のそれぞれに着目し、生徒が自分の経験や体験を思い起こして2人に寄り添うだけではなく、正一が「なぜ、そこまでして和也の肖像画を彫ったのか」を考えることにも焦点を当てるのが授業内に必要であったのではないかと考える。いつも一緒に生活していた和也と正一が離ればなれになり、「対等性」「相互性」が崩れたようにみえる場面<sup>1</sup>にありながらも、正一は途絶えた和也からのエールをなお励みに一所懸命取り組んでいる。その態度、姿勢、前進しようとする意欲の要因を生徒たちは感じていたはずである。そこを生徒間で練り上げていく過程が授業内に必要であったと反省している。この過程はこの資料の根底にある友情を継続することの困難さであり、その壁を越えるには「互いに個性を認め合うこと」が不可欠なことである。その上で励まし合って个性的能力を伸ばし合うようであれば友情の尊さは学び得ない。

また、この授業プロセスを経て「涙があふれたとき」と「目をつむったとき」の和也の思いの差異について生徒が考えるときこそ、じっくりと自分自身と向き合える時間となったであろう。友と心から語り合い、時には問題を指摘し合いながらそれぞれが切磋琢磨できる友こそが、本当の語り合える友だちである。生徒の中には、この資料が読み手の心を打つのはこのような友だちとはなかなか出会うことはないからだという意見もあった。

- ⑤「涙があふれたとき」と「目をつむったとき」の和也の思いについて考え、個人内で価値を深めていくこと主眼においた。

資料内の人物に生徒が自分を重ねあわせることは難しいが、同一人物の2つの表情の比較により、その違いを捉え根拠を述べる際に和也により近い視点で思考を深めることができた。

## 9. 生徒の感想

「なみだがあふれたとき」の和也の気持ち

- ・正一がずっと和也のことを思ってくれていたことに感心し、嬉しく思っている（感涙）。
- ・正一の自分への思い（信頼、責任）を目の当たりにして感動し、感謝している。
- ・自分のためにも病と戦ってくれていることに感謝している。
- ・ずっと音沙汰がなかった存在を確認できて安心している。
- ・正一は自分にとっての一番の友だちだと思った。・「なんとなく」書かなくなった自分が情けない。

「目をつむったとき」の和也の気持ち

- ・自分は少しも頑張っていなかったこと、友を疑ったことへの反省と申し訳ない気持ち。
- ・友の信頼に対し、自分はその思いをないがしろにした背徳感にさいなまれている。
- ・正一に手紙を書く、会いに行くことを考えている。
- ・苦勞して描いた絵を見て友も頑張っているため、自分も頑張ろうという心情。
- ・過去の正一との楽しかった思い出を思い出し冷静になって、改めて正一への思いを馳せている。

- ・肖像画ができるまでの1年間の正一のことを想像したり、正一と過ごした頃を思い出している。
- ・和也と正一の間「友情の輪」が改めて出来た。さらに和也の心の中に「友情の芽」も芽生えた。
- ・正一の病気がよくなることを祈っている。
- ・自分のことを思ってくれていた嬉しさ。 ・友情の良さを感じている。

あなたの考えるよりよい友情とはどのようなものですか。

- ・いつまでも信頼していつ、その信じる気持ちを貫いていけるもの。
- ・信頼し続けることの大変さがわかりその大変なことができたからこそ、よりよい友情になると思う。
- ・時間に負けない友情がよりよい友情だと思う。 ・どちらもが相手に思いやりを持っている。
- ・互いに信じ合えること。
- ・ずっと友だちと一緒にいたいという気持ちがなくならずに、その気持ちがおおきくなる友情。
- ・わいわい楽しいだけとか、言葉で伝わるとか、それだけではないと思う。
- ・離れていても深めることができ、ずっと続くもの。
- ・ありのままをさらけ出していること。 ・本音を言い合える関係。
- ・しっかりとお互いが目標をもち、思いを通じ合えていけばよりよい関係になると思う。
- ・相手を信じることだと思う。互いに信じていたら励まし合うことができたと思うから。
- ・離れていても、お互いのことを思い合い、両方が成長していける関係。

## 10. おわりに～反省と課題～

- (1) このたびの実践では、友情の尊さの本質である切磋琢磨について深めることが不十分であった。  
問いの精選や板書の構造化をもてさらに価値を追求することができた。今後の大きな課題である。
- (2) このたびは「友情」についてはこの資料でしか取り上げていないが、他の友情についての資料とのつながりを考え、「友情」について螺旋的な価値の学びについて実践していきたい。
- (3) 次年度、評価について小学校との連携を考えた中学校に適した評価を構築していく必要がある。「知」を鍛える授業展開の3つの視点ごとにおける評価規準を示すことが求められる。  
「知」の認識の場面において…価値を認識する。ねらいとする道徳的価値に対して考えていることを自分のもっている知識・経験をもとにして認識する。  
「知」の構造化の場面において…自己との対峙。資料等の場面・出来事に対して、あらゆる見方・考え方があることを知り比べることで、新たに道徳的価値の自覚を図る。  
「知」の活用場面において…自己の在り方を考える。新たに道徳的価値を自覚することでこれから自分のありかたについてより深く、より正確に展望する。

また、「子供の姿」を見取るための具体的方策（評価方法）として以下のことを鑑み研究を進めていく。

- ・長期的な目標とは別にそれを鑑みた本時の授業の具体的なねらいの明確化。
- ・授業の効果の検証として、生徒が価値のよさを自分のことばで説明する活動。

## 11. 引用・引用文献

- 『小学校学習指導要領解説 道徳編』文部科学省 道徳編東洋館出版社 平成20（2008）年  
 『中学校学習指導要領解説 道徳編』文部科学省 日本文教出版 平成20（2008）年  
 『道徳教育は教えられるか』村井 実 国土社  
 『道徳教育の構造』『小学校道徳 内容の研究と展開』村上敏治 明治図書